

南方（仏印）

軍隊の想い出（二）

長野県 上原 勝義

（旧姓 柳沢）

松本—仏印 昭和十八年四月

（同十九年七月）

昭和十六（一九四二）年十二月、当時、私どもの入隊する原隊は北支に駐屯の第二十一師団（討兵団）で、北部仏印（現・ベトナム）へ転進のため移動を開始した。

これは大東亜戦争勃発で、初戦に比島のマニラの米比軍は日本軍の攻撃を受け、バターン半島コ

レヒドール島に退却した。日本軍はバターン半島の米比軍の兵力を甘く見て、二個師団を比島より他へ転進させ、奈良兵団に攻撃を命じたが、戦闘を開始したら予想に反し倍以上の七万余の大軍と堅固な要塞より反撃され、壊滅に近い大損害を被り攻撃は悉く失敗した。

軍はこの失敗をひた隠しに隠し、各地より兵力、火力を増強する。幸か不幸か仏印に転進する第二十一師団の右翼連隊、歩兵第六十二連隊が急遽比島に転進を命ぜられ、第八十二及び第八十三連隊は予定通り仏印に転進することとなった。

軍は先の失敗に懲り、今度は大軍と大小の火砲、戦車、飛行機も協力させ、昭和十七年四月三日、総攻撃を開始、苦戦と甚大なる犠牲を払ってバタ

ー半島を攻略した。

私は昭和十七年十二月に入隊が予定されていたが、前記のように原隊は比島で激戦中であつたため、昭和十八年四月に入隊は延期となつた。この比島も十二月全島が平定し、第六十二連隊も幾多の犠牲と血潮を比島に残し、十二月に仏印ハイフオンに転進上陸、第二十一師団は、ようやくここに全軍の集結が完了した。しかし既に第五中隊は、この比島の激戦で中隊の半数近い犠牲をだしてゐた。

私は、昭和十八年四月一日、松本歩兵第一五〇連隊に入隊した。この歩兵第一五〇連隊の要員と歩兵第六十二連隊の要員は、すでに内地に決定していた兵は冬服と軍帽、外地の兵は夏服と戦闘帽が支給され、仏印の原隊からは将校と下士官が迎えに来ていた。運良く私は外地仏印の要員だった。慌ただしく幾種の予防注射をして、すぐに出陣かと思つたのだが船が無いのか、どうしたのか松本

に三カ月も置かれた。松本の要員は六月末に三カ月の基本教育も終わり、七月初めに外泊で二〜三日家に帰れると言つてゐた。我々も内心、外泊ができるかなと淡い気持ちを持つていたら六月二十七日、出陣命令が出て営庭で出陣式が行われた。

二十八日早朝汽車で松本を出発、淡い期待の気持ちは一辺に吹き飛んでしまった。二十九日夜半、広島宇品港を二十四隻の大輸送船団で出港、駆逐艦二隻が護衛し、二時間おきに飛行機が飛来して船団の上空を二、三周して翼を振って基地に還つて行く。心強い護衛も台湾の高雄までであつた。

七月十四日高雄港の船中でまだ見ぬ連隊の軍旗祭を盛大にやる。その後は各船単独で目的地に向かい、七月二十四日無事に南部仏印サイゴン港に入港した。宇品出港以来一カ月、二十一歳の信州健児千人が仏印への第一歩を印した。

ここより汽車で北進四昼夜、七月三十日早朝歩兵第六十二連隊に到着した。松本へ迎えに来られた斎藤曹長殿と笠松軍曹殿に引率されて同年兵五

十九人は同連隊の入りの第五中隊に入隊した。中隊は五個の内務班に分かれ、私は四班の（軽機関銃）教育班長西川富利軍曹殿、助手辻武、東久作の各上等兵殿が待っていた。

この人達は比島バターの激戦の生き残りの猛者で実戦に即した教育を三〇度の炎天下で三カ月、内地の兵の倍以上の教育とビンタも五倍以上頂戴して辛い基本教育もようやく終了、十一月三日の明治節に、十月一日付けで皆一等兵に進級した。

昭和十八年十一月三十日激しい瓦斯教育も終わり、十二月二日に本年最後の中隊の銃剣術大会があった。五つの内務班の對抗試合で、前回も四班（軽機関銃）が優勝して、内務班の入りに銃剣術優勝班と大きい額が掲げている。昔から軍隊には「射撃ボンヤリ銃術馬鹿」と定説があり。射撃の巧い者はぼやーっとして銃術の強い者は馬鹿だとのこと。古参兵にその訳をお聞きしたら笑いながら射撃は他のことは何も考えずに撃つことだらう。銃術は相手に向かい何事にも恐れず猪のよ

うに突き進むことだろうと教えてくれたが、あたらなくも遠からず、私はこの馬鹿の部類で中々巧い表現で的中していると感心する。

大会も無事に終わる、運良く十五勝全勝して優勝。同年兵一位で七級になり、ビールダーズ、頂戴した。流石に四班は強い。貰ったビールで祝勝の会食をする。翌日戦友の米丘兵長殿から「柳沢、昨日は良く頑張った。ご苦労だった」と大きい羊羹を頂戴した。

十二月五日、サイゴンに南部防衛隊が新しく編成され、第五中隊から三十人近い戦友が転属し、また連隊より北へ二〇〇キロ地点ドンキョンに飛行場建設の作業隊が編成され、一個小隊三十人が出発する。私もその中の一員となる。

日本軍進駐前の重要な援蔣ルートで、現地は山の中で辺りは一面ジャングルに覆われている密林地帯だ。川は水清く、十二月なのに大きな虫が飛び交い故郷を想いだす。しかしマラリア蚊の繁殖には最適で仏印一番の悪性マラリアの発生地をか

つて仏軍が中国軍に備えて建設をしたが途中で放棄したといわれる。大きくはないが大分できていた。

宿舎は椰子の葉と竹で造って雨露は凌げるが壁は隙間だらけ、その宿舎が点々とある。作業は滑走路へ使用する土取りだ。トロッコに掘り取った土を円匙で下から投げ上げて入れる。初年兵三人一組でこれも競争で入れさせられる。レールは単線で、トロッコは出る時は一番先で、入って来る時は最後だ。古参兵の場所はトロッコより上で土が豊富で労力も我々の三分の一ぐらいですぐに満杯になる。

ようやく一日の作業も終わり宿舎に帰れば古参兵の洗濯、兵器の手入れ、宿舎の掃除、食事の準備等雑用が山程ある。夜は歩哨や不寝番と、よくまあこう体が持つものだ和我れながら感心する。二十一歳の元気盛りとは言え、激しい作業の連続で体力も次第に低下したが元気で頑張る。

十五日位でこの作業は終わった。今度は滑走路へ敷く碎石を作るため二人が一組で岩石に発破をかける。穴掘りだ。長さ一メートルの鑿のみを一人が支え、他の一人が大ハンマーで力いっぱい叩いて深さ一メートルの穴を開ける作業だ。

連日の激しい作業のためか食欲が無くなり、体がだるくなるのを我慢して頑張る。戦友が心配して隊付の衛生兵に話してくれるが「少しぐらい体の調子が悪いのが何だ、甘たれるな」と大声で怒鳴られる。

こうして何が何でも頑張れと交互に励ましてくれるが精も根も尽き果て夢中で鑿を支える。突然目の前が真っ暗になり、大地がぐうつと目前に迫ってきた、までは分かるが、そのまま意識不明になる。

元気になってから中沢君が話してくれたが、急報で駆けつけた衛生兵が驚いて顔面蒼白になり、私を担架で医務室へ急送してくれる。衛生軍曹殿が隊付きの衛生兵は何をしていたのかと叱って、

衛生兵は三つ程殴られ、胸がすうつとしたよと笑っていた。すぐに軍医殿が呼ばれ注射をしてくれたらしく、次第に辺りが明るくなり、良く見えるようになる。古参班長殿が典型的マラリアだと教えてくださる。気が付いたとたんに頭が激痛し、各関節も痛く高熱（四二・五度）で肝臓と脾臓が犯され、黄疸になる。発熱流汗とまさに仏印一の悪性マラリアで、しかも初期治療が遅れ脳をやられる恐れがあるので間断なく冷水で冷してくれた。日の経過と共に発作も次第に遠のき、一月末にはすっかり元を取り戻すことができた。一カ月ぶりに中隊復帰の命令が出ていた。お世話になった戦友と別れ二カ月ぶりに中隊に戻る。中隊復帰は連隊の銃剣術大会出場のためだった。

昭和十九年二月、私がマラリアで入室中に作業隊より先に中隊に帰った同年兵二人が、古参兵の猛者連と宮庭で朝から入れ変わり、立ち代り、猛稽古をしている。軍隊と言う所は実に極端で練兵

休が終わった途端に健兵として使われる。初日と二日目の稽古は体に応えたが、四日目頃から以前の体に戻ってきた。

一期の検閲が終わり、ホッと一息する余裕もなく、今度は毒ガス兵の修業を命ぜられる。軍隊にはいろいろの特業がある。衣服を修理する縫工、皮類を修理する装工、軍馬の金沓を作る装鉄工、兵器修理の鍛工兵、軍用犬取り扱い兵、鳩兵、ラップ通信、衛生兵、担架兵、作業兵等、瓦斯と作業は生き地獄と言ひ伝えのあるほど酷い訓練だ。

一カ月の短期教育の詰め込み教育で、実物の毒ガスを使用して炎天下で防毒面を装着しての猛訓練は激しさを通り越している。極端に言えば首を絞めて全速力で駆けさせるようなものだ。

半月ぐらいしたら、十八歳の時に被病した左胸膜炎の兆候が現れ、戦友が衛生兵に医務室に連れて行けと強引に診察を受ける。その結果五日間の練兵休を命ぜられる。

この五日間で瓦斯防護教範の重要部を全部覚え

てしまった。この休養ですっかり元気を取り戻し再び演習に出る。

一カ月の短期教育で七回の筆記試験があった。初日の試験が七〇点、二回目からは全部満点だった。一等兵に進級し上から十五番までは上等兵候補者として特別教育があり、入隊してから満一カ月経つと八人ぐらいいは一選抜の上等兵に進級する。

昭和十九年三月十六日夜、同年兵の佐藤君と不寝番の勤務に就く。一巡して戻ったら佐藤君が今俺達の進級会議が始まったと知らせる。

昭和十九年五月中旬、ビルマの戦況はいよいよ風雲急を告げ、各戦線は苦戦に苦戦の連続、この兵員補充のために連隊より四百余人の人員がビルマに転属することとなった。

我が第五中隊からも三十人の戦友が転属して、各内務班共に急に淋しくなり、内務班は総編成替えとなった。私は相変わらず四班の軽機関銃に残った。初年兵一期教育の時、戦友でさんざんお世

話になった瀬戸上等兵殿（五年兵）が四班に戻り、私の右隣で戦友となり意を強くする。英曹長殿と沢合伍長殿は兵四人と連隊より三〇〇キロ南の清化（タンホア）に分遣となり、米丘兵長殿はサイゴンの南部防衛隊に転属する。

館伍長殿が四班の班長になる。六月になり初年兵の教育が終わり各内務班に配置され十人入る。西田上等兵（四年兵）も初年兵の教育が終わり、兵長に進級して四班に戻って来た。初年兵が来たので急に楽になり暇ができた。

第一衛兵所勤務の時は表門が軍旗の歩哨だ。一等兵でも任務は重い個所ばかりで、九時に衛兵交代で中隊にもどる。第五中隊は連隊の入り口で衛兵所まで三〇メートルの距離である。連隊より約三〇キロ離れた仏印第二の大河「ソンコイカワ」へ連隊の炊事場で使用する薪材（長さ二メートル）をトラックで運搬する使役のため、四カ月下の補充兵三人を連れて連隊の炊事場に集合する。

トラックに乗り現場へ到着すると現地人の木造船に積みこんだ薪材が船着き場に到着していた。

この薪材を船よりかつぎ揚げトラックに積み込む作業である。船より堤防上までは五メートルの高さ、水面上メートルは石積で、それより上は堤防である。薪材は一人で運ぶのにちようど度良い重量に揃っているが、時には太い材が混ざっている。並の力では一人では無理だ。

二人で担ぎ上げるにも力が同じでないと急勾配の堤防で危険である。作業開始から一時間足らずで途中で落として後を担いでいた兵が下敷きになり足を骨折した。そのままそこに転がしておいては邪魔になるので、無理すれば一人で担ぎ上げられそうだったので、生まれ持ったの馬鹿力で、側にいた兵に肩の上へ上げてさせて、一人で堤防を担ぎ上げトラックに放り落とす。

翌日も昨日と同じく連隊の炊事場に集合する顔ぶれは大半同じだったが、作業は昨日と同様太くて重いのは私の受持ち、急勾配の堤防を他の兵と

同じ歩調で悠々と無事に皆担ぎあげて作業は終了する。

七月の初旬に再び夏の中隊銃剣術大会があり、各内務班對抗兼各年次の個人対抗試合が行われた。仏印の七月は暑い。太陽が真上から照り付ける。木陰で半袖、半ズボンで何もせずに休んでいても汗が流れる。

軍隊の内務班は各年次兵を平等に配置してある。二組以上の年次は一回戦で、勝星の多い上位三人が二回戦に出場して一位を決定する。試合は順調に勝ち進み七勝一敗で午前の部は終わる。午後は五戦で二勝すれば三位以内と思いつながらも、三勝して十勝三敗で、一組で二位になって良かった。

七月十四日は連隊の一大祭日の軍旗祭である。歩兵連隊の象徴たる軍旗は一年に三回ぐらいしか見られない。この軍旗祭も盛大に終わり、明くれば十五日「柳沢、明日タンホアへ行くから準備しておけ」とタンホアに分遣を命ぜられる。

十七日、夕方無事にタンホアに到着宿舎に入る。沢合班長殿以下既に分遣されて居た皆さんに挨拶をする。第六中隊は十三人の編成である。軽機関銃二挺、小銃十一、現地はタンホアの街から二キロぐらい離れた原野で、山砲連隊第六中隊の一個小隊が現地人を使用して飛行場を建設し二キロメートルの滑走路を作っていた。

輜重連隊よりトラック三台で資材を運搬し、我々歩兵は、対空監視と敵機来襲時の対空射撃が任務である。滑走路の原形は大体できていた。五年兵の古参兵殿は皆良い人で我々若年兵の面倒をよくみてくれ、小言も言わず一戸の家族同様で毎日が楽しく、一日勤務して翌日は休養、中隊とは天と地ほどの違いで、軍隊にもこんな所があるのかと吃驚する。

木材で組み立てた高い望楼で、精度の良い双眼鏡で四方の上空を監視しながらかすかな爆音も聞き取る。視界は広く、フランスの民間機なら北か

ら南に飛行する機影は三十分は楽に見られた。一時間の監視で三交代勤務である。時々在支米軍の大型爆撃機B 24が来襲したが、八千メートル以上の高度で飛行場を避け悠々と去って行く。

敵機は来るが友軍の飛行機は在隊中に三回見たのみだ。文学肌の山田さんが「戦塵ノート」に

『秋の陽に 照映えられて 悠々と

駈き行く敵機に 砲も届かず』

と敵機を睨みながら無念の心中を書いてあった。

二週間に一度ぐらい二十キロ離れた海水浴場にいるサムソンへ交代で海水浴に行く。生まれて初めて泳ぐ海も楽しい半日だった。一カ月に一回、タンホアの街に外出する。安南の古都で美しい街並みで見る物皆珍しく、立派で、驚き感心するのみ。軍指定の食堂で物価も安くビール一本三十五銭、サイダー一本二十五銭、お汁粉一杯二十銭、大きいパイナップル一個十五銭、バナナ五十銭も買えば二人では食べ切れない。一等兵の一カ月の

俸給が二十一円だった。

【解説】

大東亜戦争が開始されて後、昭和十八年頃より、各地での敵機の活躍、反攻の動向が顕著となり、ビルマ方面、壕北方面、仏印などの戦備の強化に、努力が払われてきた。

とくに昭和十八年に入って南東方面の情勢がいよいよ重大化するに伴って、第十九軍の戦闘序列が令された。即ち第十九軍の新設であった。

また同時に、南西方面においても防衛強化を図るために仏領インドシナにおいては、新たに仏領インドシナ軍が編成され、昭和十七年十一月十日、南方軍の隷下に編入されている。当時の軍司令官は陸軍中将町尻量基が任命されサイゴンに司令部を置き、仏印駐屯の部隊を指揮して、インドシナ当局と仏印防衛に関して協力するとともに、第二十一師団に対しては、単に防衛上に限定された指揮権に止まっていたと言われ、幕僚通信機能も貧

弱で、強力な作戦軍としての機能発揮には著しく欠くところが多かったと言われている。

仏印に進駐していた第二十一師団は、最終的に第三十八軍（信兵团）として第二師団、第五十五師団、第三十七師団、独立混成第三十四旅団と戦闘序列にあり、かつ体験記筆者が、自身の入隊前の第二十一師団の動静を記しているごとく、第二十一師団の歩兵第六十二連隊は比島に転戦、歩兵第八十二及び第八十三連隊は仏印に展開しており、比島に転戦していた歩兵第六十二連隊が仏印に戻りハイホンに上陸、第二十一師団全部が仏印に集結を完了したのは昭和十七年の十二月のことである。

体験記筆者は昭和十八年四月、松本第一五〇連隊に入隊、すぐ歩兵第六十二連隊の仏印派遣要員として夏服を支給される。そして三カ月の教育を終えて、六月に宇品から台湾を経て、昭和十八年

七月二十四日に、仏印のサイゴンに上陸している。同行の信州健児千人という。

そして、この仏印の地に駐屯して、歩兵第六十二連隊の比島帰りの生残りの猛者である古兵、先輩から実戦に即した教育を受け、また内務班でも内地に勝る厳しい基本教育を受けたことを体験として記している。

その中において、筆者は銃剣術に秀でる特技があり、各班対抗、大隊大会などに選抜、出場して、班のために活躍、幾多の賞品を獲得して、部隊内でも有名を馳せている。筆者は、これらのエピソードを交えながら、戦地でのいわゆる駐屯部隊の軍隊生活を如実に記録している。

また飛行場の建設の苦勞、毒ガス兵の修業などが語られているが、とくに毒ガス教育では、実物の毒ガスを使用して、炎天下で、防毒面を装着しての猛訓練、これは激しさを通り越し、首を絞めて全速力で駆けさせるようなものだ、と述懐する。

筆者は「軍隊の想い出」として九篇に及ぶ長原稿を寄せられている。すべて仏印進駐時の体験記で、今後、要約して三回の連載を考えている。（編者記）